若越郷土研究　五十四巻二号

大野晋先生追慕

―あつい学恩を感謝して―

永江秀雄

著名な国語学者、大野晋（すすむ）博士が逝去された。その翌日、七月十五日の新聞紙上で、私はこのことを拝承した。多年にわたり、懇切な御教導と御愛顧を賜った学恩を思い、衷心より御冥福をお祈り申し上げている。

大野先生の多数の御著書のうち、私も昭和三十二年（第三刷）発行の『上代仮名遣の研究』を始め、幾冊をも購読学習させて頂いてきたが、私が大野先生に直接お会いできたのは、昭和四十四年十月、福井大学で開催された国語学会（秋季大会）での、ひとときであった。全国から多くの国語学者、研究者が参集され、いろいろな発表もあったが、私はこの時、大野先生にお目にかかれたこと、私の名刺をお渡し申し上げたら、丁寧に御覧くださったこと、そして特に地名（郡名）の「遠敷」に注目されたことを、今もはっきりと記憶している。

所で、直接に拝眉の栄を得たのは、この時の一回切りであったが、この前後を通じて私が大野先生から御教示を賜ったことは、国語学全般的な問題よりも、私が現在まで約六十年間にわたり、探究を続けてきた若狭の地名「遠敷」（おにゅう）の語原解釈に関連する事柄であった。この「遠敷」（古代の発音を示す歴史的仮名づかいでは「をにふ」）とは、朝鮮語（韓国語）であるとか、アイヌ語である等と言われることもある。しかし、紙面の都合でここに詳述は避けるが、端的に結論をいうとこれは、本来は「小丹生」（をにふ）という純然たる日本語であった。また、この場合「丹生」（にゅう）とは何かについて異説もあるが、江戸時代後期の若狭小浜の国学者伴信友も卓見を述べており（『若狭旧事考』）、歴史学者松田寿男博士、鉱床学者矢嶋澄策博士の綿密な研究発表（大著『丹生の研究』など）にある通り、これは「丹」すなわち「朱」（辰砂、主成分は硫化水銀）の産地を表わす言葉である。

松田博士、矢嶋博士に直接師事し、「遠敷」から更に全国的な「丹生」の研究に進んだ私は、その結果を幾つもの論稿として発表して来たが、この小論を大野先生にも度々お送り申し上げて、御高覧と御叱正を仰いだ。大野先生は極めて御多忙なお方であるにもかかわらず、その都度、たとえ遅れることがあっても必ず御返書を賜った。

ある時、先生がハガキ一杯にぎっしりと御意見を書いてお送り下さった御返書が、郵便配達の時に雨にぬれたらしく、所々に読めない文字ができてしまった。一言一句のみならず、一点一画もゆるがせにできない内容なので、私は困惑した。そこで職場で熟練の女性にワープロを打ってもらい、読めない所は空白の括弧書きとしてもらった。ちょうどクイズのような文面を、私は意を決して「恐れながら」と大野先生にお送りし、その空白を埋めて頂くようにお願い申し上げた。所が、先生から折り返し、新しいハガキに元通りの文章を書き、しかも、今度はそれを封筒に入れてお送り下さったのである。私は大野先生から数々の御高配を賜ったが、まさに厚い（熱い）学恩を想う時、今も感涙を禁じ得ない。

若狭の「遠敷」から出発した私の研究は、恩師の歴史学者松田寿男博士に導かれて、更

に「丹生」から「真金」へと進展した。これは『万葉集』巻十四（東歌・あずまうた）に、「真金（まかね）吹く丹生の真朱（まそほ）」という言葉が出ているが、この真朱とは丹生で採取される朱（硫化水銀）のことであり、この水銀を用いて、いわゆるアマルガム法により「真金」を精錬することであるというのが、松田博士の見解である。私も師説を信奉しているし、現在では広くこのことが認められている。所が、この「真金」という言葉が、長年（私の調べた結果では九百年ばかり前から）、「鉄」であると解釈されてきたのであるが、松田博士は、これを明確に「金」（黄金、gold）と断定されたのである。そして、私も国語あるいは漢語の研究から、これが鉄ではなく、「黄金」であることを証明できた。私はこの概要を平成四年、日本地名研究所における全国地名研究者大会のパネル討論で発表し、更に平成六年の日本地名研究所紀要「地名と風土」第一号に、〃地名「丹生」と歌語「真金」〃と題し、詳述発表した。

私は右の論考の中で、最近の国語辞書や古語辞典に、「まがね」（最初は「まかね」）を「鉄」と説いているものがあるが、誤りである旨も述べておいた。実は大野先生たちが昭和四十九年に編纂発行された有名な『岩波古語辞典』にも、真金を鉄とする解釈が古い用例をも挙げて掲げられている。私はその辞典を批判するつもりなど全くなかったが、いつもの通り大野先生に拙論の御高覧をお願い申し上げた。すると、日ならずして先生から御返書を頂いた。そこには思いもかけず「真金」について、「これからは、あなたの発表されたことが定説となるでしょう」と明記されてあった。

大野晋先生は、タミル語の研究でも感得される通り、御自分の研究・信条を決して軽々に撤回変更されるような学者ではない。この御返書を賜って私の方が、よほど神妙な気持ちになってしまった。また、私が今このような発表をするのも、断じて自慢話などするためではない。昨年二月二十四日の福井新聞に、その著書『日本語の起源』から50年と題して、大野先生の言葉が詳しく紹介されているが、その中に「自分の仕事をかえりみて、そこがしっかりしていれば、ぶったたかれても大丈夫。人が正しければ、僕は誤りを認め、真実に賛成する」とある。全くその通りの先生なんだと感に堪えず、大野先生の尊い真姿を皆さまにも知って頂きたく、その一事例を紹介させて頂いた次第である。また、その後に、大野先生から直接のお電話を頂き、「永江さん、あなたの論考は、大事なことが、とてもわかりやすく書いてあります。なかなか、こうは書けないものです」とのお言葉を賜り、長年の研究が決して無駄でなかったことを喜んだ私である。

なお、私は著名な国文学者で、学習院大学教授ともなられた小高敏郎先生に、特に若狭武田氏の文芸に関連する事柄を中心に、長年にわたり親しくご指導を賜った。若狭にお迎えした小高先生から、私のお尋ねに対し、先生の先輩に当たられる学習院大学教授の大野晋先生が、その当時、皇太子殿下に御講義をされていること、小高先生は義宮様に御講義されている旨をお答え下さった。すなわち、大野先生は今上陛下（現在の天皇陛下）の先生であり、小高先生は現在の常陸宮殿下の先生であった。貴い御身分に一切かかわりなく、

この田夫野人に対し終始ねんごろな御高導を賜った、今は亡き両先生の学恩を、私はいつも、いつまでも決して忘れることはできない。

（福井県郷土誌懇談会理事）

二〇〇八・七・三一稿

（付記）

この拙稿は、平成二十年七月、大野晋先生の御逝去を新聞報道で拝承し執筆。寄稿を依頼されることもある某紙へ投稿したが、「長過ぎる」と言って即座に返却された（理解が得られなかった）。その後、発表の機会を待望していたが、このたび本誌に御収載して頂けることとなり、深く感謝申し上げている。